

# JISS

The Japan Institute of  
Scandinavian Studies

No. 318  
2000/11

発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株)科学新聞社内5階 TEL03(5776)1835/FAX03(5776)1836  
発行人 松元さぎり Publisher&Editor Sagiri Matsumoto 編集責任者 川崎一彦 Editor in Chief Kazuhiko Kawasaki  
デザイン ワンバイワンステーション 印刷所 東友印刷 2000年11月25日発行 No. 318



Photo 中嶋千絵 (dill.com)

## 情報は北から ～情報先進国・北欧に学ぶ～

北海道東海大学工学部・情報システム学科教授 上瀧 實

Hokkaido Tokai University Prof. Minoru Kotaki

平成12年11月10日(金)、スウェーデン大使館オーデトリウムにて、「情報は北から」と題した講演会を開催した。北海道東海大学工学部・情報システム学科の上瀧實教授を講師にお迎えし、なぜスウェーデンを筆頭に北欧諸国は、世界のIT先進国地域となったのか。更に、情報化の急速な進展による弊害について、また、北欧諸国から学ぶべき点などの貴重なお話しを頂いた。

### 1. 情報化の流れ

今日、テレビや新聞等のマスコミでITという用語を耳にしない日は無いほど、情報通信技術は社会のキーテクノロジーとなっている。現在、デジタル技術を核とした情報通信技術によって、価値観や社会システムなどが劇的に変化しているが、この変化を「IT革命」とよんでいる。IT革命は人類がこれまで成し遂げてきた、農業革命、産業革命に続く3番目の大きな社会変化とみなされている。

私たちは、人口の急激な増大と、地球が無限のものとして営まれてきた産業社会の進展により、深刻な地球規模の課題「エネルギー不安、食料不足、環境汚染問題」に直面している。これらを解決するために、地球的な視野に立った、新たな価値観の創出が求められているが、この新たな社会を支える技術的基盤として、デジタル技術が期待されている。

### 2. 北欧の実力

この世紀の変わり目(デジタル・ミレニアム)は「PC時代が終焉し、インターネット時代のはじまり」と言われるが、ITの中で最も重要なメディアがインターネットと移動通信(モバイル通信)である。インターネットの普及率を国別に比較すると、北欧諸国が上位に並んでおり、「北欧はインターネット先進国」であることがわかる。北欧諸国では「電子メール・アドレスが無いことは、一種の社会的存在を失うこと」という意識が醸成されているほどである。ちなみに日本はインターネットの普及点では三流国であろう。



スウェーデン大使館広報部カイ・レイニウス報道参事官からのお言葉を頂く。ご協力いただきこの場を借りてお礼申し上げます



講師の上瀧實氏

さらに、最近ではインターネットを携帯端末利用する時代がやって来た。すなわちモバイル通信とインターネットの融合、「ワイヤレス・マルチメディアの時代」が21世紀の初頭のトレンドである。北欧諸国はモバイル通信の分野でも世界のトップにあり、北欧は「ワイヤレス・バレイ」とも呼ばれている。数年先には、冷蔵庫、電子レンジ、デジタルカメラ、パソコン、テレビなど、あらゆる家電製品が無線で結ばれる時代が来るが、この代表的なシステム技術「Blue-Tooth」は北欧の企業が中心となって研究開発がなされている。情報インフラに関する総合的な評価の結果でも、北欧諸国は世界の上位5ヶ国の中に4ヶ国がはいっているほど、情報先進国なのである。

### 3. なぜ北欧が

北欧がなぜ情報先進国であるのか、いくつかの切り口から考えてみる。

まず、教育の情報化である。北欧諸国は人口が少なく厳しい自然環境にあるため、人的資源がなにより重要であり、教育に関する公的負担の対GNP比の高さは世界でトップとなっている。また、学校での電子メールやウェブの使用率も100%に近く、これも世界の上位である。さらに、スウェーデンでは地域自治体が企業の協力を得て、地元の労働者にCADやインターネットリテラシーなど、新たな情報関連技術の再教育に熱心に取り組んでいる。

次に、社会の複雑性が、情報通信によるコミュニケーションの重要性を高めている。つまり、女性の社会進出率、離婚率、婚外子の割合などが世界で最も高く、したがって情報ツールを駆使して親子、親戚、友人などの間で、まめにコミュニケーションを取ることが、絆の維持や一体感の醸成に極めて重要となっていることによるものである。

また、バイキング時代からの旺盛な独立心、自律的行動様式、異文化への適応性(海外進出)など伝統的な気質が、情報の収集や分析、利用の重要性を無意識に認識しているためであろう。さらに、北欧の厳しい自然環境が、災害時の連絡確保、遠隔教育や遠隔医療の実現など、



真剣にメモをとる参加者たち

情報通信技術の利用の重要性を高めている。

#### 4. 北欧に学ぶ

21世紀の社会を先取りしている北欧に、日本も学ぶところが少なくないようだ。例えば、企業の形態や文化の点からみると、北欧の企業組織は情報の共有化を計った、比較的フラットでゆるい組織である。社員は自律的な行動様式を指向し、上司もマネージャーと言うより、コーチもしくはオーケストラの指揮者の役割に近いものである。こうした情報を共有化したフラットな組織は、従来のピラミッド的組織に比べ、環境の急激な変化に素早く対応できるため、情報化社会に適した企業形態とみなされている。さらに、ノキア、エリクソン、ABB始め、多くの北欧の企業は研究開発を重視し、かつ専門性を武器に世界に進出している。そのために、産学官の緊密な連携を計っており、各地に研究開発産業都市を作っている。

資源が少ない日本は、こうした北欧諸国の方針を見習うべきであろう。また、世界の情報を収集分析したうえで、動向・ニーズなどを把握し、ヒット商品を売り出すニッチマーケット戦略、さらにバイキング時代からの異文化適応性を生かした、グローバルな視点での企業の国際展開など、日本の学ぶべき点は少なくない。

#### 5. まとめ

21世紀はインターネットとモバイル通信の融合「ワイヤレス・ネットワーク」の時代がスタートするが、北欧諸国はまさにこの新しい潮流の最先頭を走っている。北欧が情報先進国になり得たのは、バイキング時代から脈々と流れている異文化への適応性、旺盛な自立心、進取の精神、さらに厳しい自然環境下での生活などにその要因があるようだ。また、社会や企業が、21世紀の情報社会に適した形態であり、日本も大いに学ぶ必要があるだろう。



JISS恒例コーヒープレイク。  
参加者や講師との交流の場となり、好評である

Symposium of between Scandinavian and Japanese students in Sapporo

## 日本・北欧学生シンポジウムを札幌で開催

北海道東海大学教授、JISS常務理事 川崎一彦  
Hokkaido Tokai University Prof. Kazuhiko Kawasaki

北海道スウェーデン協会および北海道東海大学北欧研究会の主催、(社)スウェーデン社会研究所の後援による、第6回日本・北欧学生シンポジウムが11月11日、札幌の北海道東海大学で開催された。

学生が選んだ今年のテーマは「若者の結婚観」。ノルウェーではホーコン皇太子がシングルマザーのメッテさんと8月に同棲を始め、世界的に話題になり、折しも、オスロ大学から北海道東海大学に留学中で、シングルマザーのモニカさんもマスコミの注目を集めたためか、会場は満席に近かった。

まず、北欧事情にも詳しい花園大学社会福祉学部の古橋エツ子教授 (JISS会員) が基調講演。

学生シンポジウムでは、北欧ともしっかりと違いが大きい同棲 (sambo) についての的を絞って議論した。

ヨーテボリ大学のヨナタン・ピーク君は北欧における sambo の一般性を紹介した。コペンハーゲン商科大学のカーリン・ベウケルさんは、「sambo せずに結婚しようとしたら、親は心配で反対するだろう」とも述べた。

オスロ大学のモニカ・ニルセンさんの、自分のことは自分でさせ、決めさせる、家事を手伝わせない、男女差はつけない、18歳から一人暮らしをさせる予定、というしつけの方針が紹介された。

そして、日本との比較の上で、しつけ、および大学生の経済的自立度、の違いから、北欧では家事分担の男女共同参画も進んでいる、と分析。日本でも、結婚のシミュレーションとして同棲が社会的に受け入れられることが検討されるべきではないか、と提案した。

会場からは賛否両論が出されて活発に議論された。その後北海道スウェーデン協会の主催による懇親会で参加者の交流が深められた。



基調講演中の古橋教授

## 晩秋：一期一会の茶会【前編】

彫刻家・スウェーデン国立美術家協会・彫刻家組合員 中林ヘルグレン富紀子  
Bildkonstnär Mrs. Fukiko Hellgren-Nakabayashi

1000年余の歴史を誇るロンネビー市は、スウェーデンでも稀な親日都市でもある。市制施行600周年を記念して1987年に日本庭園が造園された。面積25ヘクタールの市公園に6平方キロメートルの敷地に、北欧の大自然を借景に配し、禅の精神を根底とした日本の伝統文化の蘊奥である、幽玄、わび、さび、風流を踏え、見事に調和させた、ヨーロッパに於ても最高のスケールを誇る枯れ山水の庭園である。蛇足ながら、1995年に筆者の自然石の彫刻2点が配置され、その一角に数寄屋を振った鄙びた趣のある木造の小屋が捉えてあり、此擲で一刻の茶会を催すのである。

茶禅一味『水を選び薪を取り、湯を沸かし茶をたてて仏に供へ人にも施し我も飲む』南方鉢一覚え書き

10時25分『しまったあ…』『stannar! 止まって下さい!』私は金切声を張り上げ駆け出したが…バスは無人の席の足元にリュックサックを乗せたまま、濃霧の中に走り去ってしまった。すぐ駐車しているバスの運転手に無線で連絡していただき、了解キオスクから市公園長ペーテル・リンダール氏に電話で事の顛末を打ち明け「大丈夫、善処するから」の一声を後に、そそくさとロンネビー市行きのバスに飛び乗った。臍を噛めども後の祭り一交通の便の悪い隣接した県に住み、予定が2日早まったために手順が狂い、早朝のバスで3時間。2回乗り継ぎ、茶、生花の道具、書総て、7個の小荷物を自らの手で運ぶ羽目に至り、一瞬の気の弛みがこの大事を招いてしまったのだ。あの中には、重立った茶道具の他に、亡き母の形見の一品まで入っている…組上の魚のように刻一刻と事の重大さに打ちひしがれ必死に祈っていた私を蘇生させたのは、バス停に出迎えた公園長の一言「もう大丈夫、車で(1駅10分程の距離)取ってきた」東天紅一暁を告げる鶏のなき声を聴く想いで思わず泣き笑い…御迷惑をお掛けした事を深謝すると共に、母の霊の加護に合掌せずには居られなかった。

11時30分市庁舎のオフィスで迷子にしたリュックサックと対面、あーよかった!そして、ふと思い付いたのだ。21世紀はソフト産業にとって世界を戦場にした乱世—その幕開けに岐阜とロンネビー市との間に携帯の礎石が敷かれた吉祥日を記念して、スウェーデンの国旗(ブルー&イエロー)を象徴した折鶴を贈りたい!「名案だ!」さっそく紙を取り寄せて下さり、私はひたすらに折り続け、会議のために出席出来ない公園長は翼にメッセージを書き、16羽誕生—どじやなあ…2時間もかかってしまった。大至急、車で庭園に送っていただき、ペール・ヘーグルド、マリアン・ニルソン両職員の熱心な協力のお陰で、道具組み、書、生花を神速に断を下し、設える事が出来た。

遙か向こうの山門の前にバスが停車したのが木の間越しにほの見え間もなく定刻の3時半なのだ。あわただしく和服に着替え、ふと見ると一番乗りはSydnytt TVのカメラマン。会釈もそこそこに竹の緑に映える日本の楓の紅葉を踏み、露地



数寄屋を前にして涼み台で寛がれる来賓御一行と関係者/中央は訪問団团长安藤氏と筆者

から階を昇り、涼み台を渡って来られる賓客を迎え付けた。

「俄か亭主でございます。本日は遠路はるばるようこそお越し下さいました」思いがけず、山姥ならぬ妙齢を遙かに過ぎたとはいえ、共かくも和服姿の日本女性の出現にわあ〜んと一瞬親しみに満ちたどよめきが広がった。私も訪問団团长安藤隆年氏をはじめ御一行の皆様を一目見た瞬間、なぜか懐かしさがこみ上げてきた。それは大事を達成し、この静寂な情景が岐阜—ものものふの後裔に受け継がれている、典型的な日本男子の持つ真摯な風格を反映したその移り香なのだろうか。

招待側の代表である、21世紀市の発展、期待を双肩に負う、ソフトセンターインターナショナル専務取締役ウルリカ・シモンズ女史は、才気と知性とを控え目で沈着な行動に包むその物腰に瞳目させられた。ロンネビー地方自治体産業経済部部長ベルティル・アルベルトソン氏は、温厚篤実な紳士で、仕事熱心な方とお見受けした。その他に市の関係者お二人と、スウェーデン在住の通訳の日本女性が同行された。

忽ち打ち解けて、互いに挨拶を交わし、和気藹々の内に茶席にいざなった。巾4メートル、長さ10メートルの室内は前後に出入口があり、正面、左側は星霜を経た板壁で、右側は鴨居と雲脚を振った巾10センチの横板とそれを支える数本の細い柱で区切られたシネマスコープの様に長大で矩形で、前方に黄葉した撫の森を背に、緑鮮かな蘚苔を頂いた御神体の様な巨石が鎮座している。

この空間に生命を吹込み、いのちの感応を引き出せるか否かは、私の包丁捌きにかかっているが、例え鈍包丁でも、容人は見事な砥石を持っていらっしやるのを直感して「大丈夫!」この護符を初めて自分で口にした。古人によると茶道に於る立花、書の在り方の原点は美的真実の認識と同時に宗教的真実に至る縁、更に法悦をも表現するものであり、『般若心経』にある『不増不減』が茶の世界の神髓を単的に表していると言うが—私にはまだそれが体験的に分からない。

それは共かく、涼み台から入口を入ると右手に私が彫った小型のつくばいを置き、その横に疎水をのぞみ庭園の細石を敷き、欄子に取り付けた猛宗竹の切り残し2個を立て、他の枝と組合せ、ななかまどの枝に朱の実に白、黄の小菊を活け、細石の上に紅葉した楓を散らした。 一次号に続く—

From Soft Center International Managing Director  
**岐阜ソフトピアジャパンとの携帯に寄せて**

ソフトセンターインターナショナル  
 専務取締役

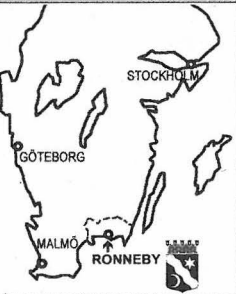
ウルリカ・シモンズ  
 Ms. Ulrika Simons

ソフトセンターは、スウェーデン南西のロンネビーという町にて設立されました。設立の目的は、事業と教育そしてソフトウェアの開発に効果的な環境を作るためでした。ロンネビーと岐阜県は、経済の下降にしたがって工場を閉鎖してきた、という点でとても似ています。ロンネビーは旧来の工業スタイルから新開発の工場へ、それから高度な教育へ建設的な変化を乗り越えてきました。今日、ソフトセンターはビジネスだけではなく、特にコンピューターサイエンス、ソフトウェア開発の分野で、およそ80の会社と2,000人の学生をかかえています。

ネットワークの成長はサイトや能力、技能のある世界中の人々を駆使し拡大してきた、ソフトウェアインターナショナルを通して1997年から始まりました。ロンネビーから離れて、我々は同じくスウェーデンにあるソフトセンター・カルマル、セーデルハムン、そして、世界中の人々とコンタクトを可能にする、アメリカ・ダラスのソフトセンターを所有しております。ソフトセンターのネットワークは、大学と社会全体に非常に近い協力体制に関連した、情報とコミュニケーション技術産業に土台をおく会社に、新しいビジネス拡張のチャンスを与えております。

2000年10月18日から、ソフトピアジャパンはソフトウェア国際ネットワークと同盟を交わしております。SCIより、我々はこの同盟が情報や体験を分かち合うだけでなく、学生や研修者の交換、おいてはソフトウェア開発の分野において共同開発をしていけるように導びいてくれればと思っている次第であります。

\*事業携帯に寄せて、ロンネビー市市長ヤンアンデシュ・パルムクヴィスト氏からの談話が以下の通り掲載された。(SYDÖSTRAN 2000, 10/19日号)



ロンネビー所在地と市のシンボルマーク

Visit to Soft Center and city in Ronneby  
**ロンネビー市及びソフトセンターロンネビーを訪問して**



ソフトピアジャパンの  
 マーク

岐阜県ITビジネス連携構築  
 北欧ミッション団長  
 安藤隆年

Mr. Takatoshi Ando

2000年10月18日に、私達ITビジネス連携構築北欧ミッションの一行12名は、ロンネビー市を訪問した。主な目的は、岐阜県が21世紀に向けての情報化社会の到来を視野において整備を進めてきたソフトピアジャパンとソフトセンターロンネビーとの協力関係を進めるため協定締結である。

ソフトピアジャパンは、基本的にはサイエンスパークとしての性質を持っているが、ビジネスの面のみにフォーカスを当てているのではなく、ソフトピアを拠点としてIT関係の研究開発や人材育成にも積極的に取り組み、総合的なITの拠点づくりを目指したプロジェクトである。

また、日本の中の一地方政府である岐阜県が進めているプロジェクトであるが、その狙いは、単に岐阜県内の産業振興やIT化の促進のみではなく、日本全体あるいは世界を視野にいれて世界の情報ハブステーションとなることを目指している。

現在約1600人のIT関係のプロフェッショナルやその候補生が集い、世界の12の地域や機関との正式の協力関係を持ち、着実に発展しているソフトピアジャパンであるが、2005年には5000人以上が集う世界のITの最先端地域として発展していくことを目指している。

ソフトセンターロンネビーもIT先進国スウェーデンの中で、重要な役割を果たしているサイエンスパークであり、協力関係が樹立は、両者の今後の発展に重要な意味を持つものであると認識している。

重要な意味を持つ私たちの訪問に対して、ロンネビー市のヤン・アンデシュ・パルムクヴィスト市長やソフトセンターインターナショナルのアンデシュ・ニルソン会長、ウルリカ・シモンズ所長他多くの人の歓迎を受け無事協定書の調印を済ますことができ、関係者に対して感謝の気持ちで一杯である。

また、ロンネビーの訪問に際して、大変印象に残り、感謝を申し上げたいことがあった。サイエンスパークとして発展を遂げられているソフトセンターの至近の地に、美しい日本庭園が整備されていたことであり、また庭園の中の茶室でティーセレモニーのもてなしを受けたことである。

ソフトピアジャパンの中にも茶室が整備してあるが、是非、次回はロンネビーの方々をおもてなししたいと考えている。

素晴らしい一時を提供して下さいの中林ヘルグレン富紀子氏にも、訪問団一同を代表して感謝申し上げる。有り難うございました。



ロンネビー地方紙 (BLT 2000, 10/19日号) に事業携帯の記事が掲載された。安藤氏とシモンズ氏/右下: ロンネビー市にあるソフトセンターインターナショナル

From Japanska Föreningen I Stockholm

スウェーデン・ストックホルム日本人会 座談会

## 我が青春のストックホルム

—1960年代を語る—

日本国が1964年に海外渡航を自由化してから今年で35年目を迎えます。目を輝かせながら日の丸を縫い付けた大きなリュックを背負い、1965年から67年辺りにかけて、日本から外国に渡った人達—渡航自由化第一期生とでもいえる人達—に来瑞時の模様と60年代を大いに語ってもらいました。

和田：司会は私が務めさせていただきます。渡航自由化されたとき、たくさんの国があったのに、皆さんはどうしてスウェーデンを選択したのか、またその第一印象はどうだったのか、お伺いしたいと思います。まずスウェーデンへ来た理由は何でしょう。

K・寿美子：私は日本人の行かない外国だったらどこでもよかった。だから最初インドに行ったわけ。そこでスウェーデン人に会っちゃったのね、それがこの国との出会いなのよ。それでお金も無かったし、スウェーデンは働けると聞いたから、この国に来た訳です。

小林：僕は大阪の外語大生の頃、渡航自由化直後だったんですけどね、グルーッと一度ヨーロッパの国を見て歩いているんです。あの頃の学生が勉強しようとしている国は、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなんです。そこで僕は余り知られていない国を勉強してみようと思い、日本の大学に戻ってから、新たにストックホルム大学を選んだんです。授業料もタダ、それも大きな理由の一つですね。

今村：私はヨーロッパに来る気持ちは全くなく、アメリカに行く予定で、東京のアメリカ大使館へビザを申請したんですが、審査が厳しくて拒まれてしまった。それでヨーロッパに来たわけ。やはりお金がなくて、稼げる国を探していた。最初ドイツに来て、デンマークへと上がって、そこでもっと条件のいい国があると聞いたんだ。それがスウェーデンだった。確か1966年の4月末だった。

唐沢：あの当時の外貨の持出し最高額500ドルと関係があるんだよね。ほとんどの者は片道切符だったんじゃないかな。僕もスウェーデンは予定の国ではなかった。あの当時、平凡パンチという雑誌があって、僕はヨーロッパ

特派員という写真家の肩書きをもらってパリに来た。そこで絵描きをやっている日本人に会ったわけです。僕も絵描きになろうと思って、よし、こうなったらどうしてもヨーロッパに居残ってやろうと決心したんだね。たまたまスペインで知り合った日本人が、ヨーロッパで働ける国はスウェーデンだけだ、という話を聞いた。スウェーデンに来たのは、1966年3月です。

大沢：僕の場合は、外国の山を見てみたい、それが直接の動機です。あの当時、日本で海外の山と言えば、ヒマラヤとヨーロッパアルプスだったんだ。それでインド経由でヒッチハイクしながらパリまで来ました。フランスは、労働許可が下りずに働けない。許可を申請したら何十万円か出せば下ろす、と言われた。アルバイトしている知り合いから、そんなふうだったら、スウェーデンへ行ってみたら、と言われて1966年にここに来ました。

和田：僕は、1964年に出版された小田実の「何でも見てやろう」に刺激され、1965年11月にスウェーデンへ来ました。何と言っても彼が我々の先駆者でしょうね。彼の本に影響された人は多いと思う。それで僕も、横浜から船に乗って、ナホトカ、そして汽車でハバロスクへ出て、シベリア経由でフィンランドへ来たんだ。あの当時、1ドル360円だった。1965-66年は、40年振りの寒波襲来で確かマイナス40度になっているんだ。スウェーデン語は勿論、英語も全く出来なくて、仕事を捜すのも苦勞したよ。それでも、何とか仕事を見つけて皿引きから出発しました。

小林：ところで、スウェーデンへ来て住んでいる理由ですが、長期滞在者である我々は、旅行者とか留学生とは違うと思うのですが、ここで一通り聞いてみましょう。

K・寿美子：私はインドにも住んでいたし、東京も下町育ちで、ゴチャゴチャした所が好きなのよ。こんな絵葉書の様な所には住みたくない、と思いましたよ。だけど、手元に30ドルしかなくて、ストックホルムに着いたその日から働かなくては生活が成り立たない状態だったのね。あの当時、1ドルで4クローネのタバコ一箱買えたわね。それで、一生懸命に働いて病気になってしまったの。その時、親切にもらったスウェーデン人に結婚を申込みました、という次第なの。

小林：僕も寿美子さんと同じで、自然も人も全てがきれい、そして生活水準も高い。どの様な仕組みになっているんだろうな、と不思議に思いました。

大沢：生活水準なんて着いてすぐ分かるものではないでしょう。何かビーンと響いたんですか？

小林：スウェーデンに来る前に、中東や他のヨーロッパの国を先に見ていたの、直ぐ分かりました。

今村：街並みも何もかも整ってきれいだったね。住めばすぐに生活水準の高さは分かりますよ。

K・寿美子：あの当時は、今と違って紙くずなんて落ちていなかったわね。

唐沢：僕の場合、きれいだな、と感じたのは、フィンランドです。僕もシベリア経由で来ていますから、そこで飛行機でヨーロッパに飛んでいるんです。そして取材で8ヶ月程、ヨーロッパ中を動き回って、スウェーデンに来ているんです。3月のスウェーデンはもの凄く寒かった。マイナス23度はありましたね。夜は長く暗い。僕は、むしろ厳しさを感じました。そして、2-3ヶ月すると、明るい、陽のキラキラした春でしょう。街も清潔で若者ともすぐ仲良くなれる気持ちが出て素晴らしいと思いましたね。

大沢：ヒッチハイクで辿りついたのが、雨がシトシト降っている夏の夜だった。その翌日から職安へ出かけて、仕事を見つけて直ぐ働き始めたので、直後の印象はないんですね。だけど、その日仕事が終わって、バス停でバスを待っていると、蝶々が飛んできた。それは、コヒオドシという高山蝶だった。日本では、高山にしか住んでいないのが、ここには平地にいる。この気候も日本の高山と同じようなんだな、きっと素晴らしい自然に囲まれているに違いない、と思いましたね。

小林：60年代を語る、という事だから、スウェーデンの時代認識を僕なりに述べると、60年代後半までが、黄金時代でヨーロッパの中で、あらゆるものが飛び抜けていたんです。それから、経済が次第に下り坂になって、それらがキープ出来なくなった。それでも、生活水準は、何とか人口が少ない事もあって、保っていますが、社会保障はどんどん削られている。それともう一つ、政治的には中立政策を長いこととっていたんですが、共産国の崩壊に伴って、その政策の意味が次第に薄れてきた。そのような事を考えると、昔は所得水準も抜群に高く、社会保障も発達していて特殊な国だったんですが、今はワン・ノブ・ゼムの国になってしまった、と思っています。

大沢：どんな所が特殊だと思ったの？

小林：学校でいうと、大学までが無料でしょう。奨学金

は簡単に借りれたし、働き始めて病気になると、給料の100%は保証された。日本とは雲泥の差でしたよ。

K・寿美子：出産した時も無料なのよね。

唐沢：とにかく、あの当時のスウェーデンは輝いていた。絶頂期に来たから、住み心地はいいし、それが我々が長く住みついた理由だね。我々は、60年代に外国に出て来たのだけれど、60年代はやはり、時代の転換期というか、特殊な時代と位置づけられないだろうか？

大沢：世界史的にみると、やはり特別だったという気はするね。

唐沢：美術史の中にも、色々新しい事が起こっているんですよ。第2次大戦の影響だろうと思います。44-45年にヨーロッパとアジアで戦争が終わっていますね。50年代になると、朝鮮戦争が始まっている。60年代はそれらが決着して、初めて戦後の上昇が始まったと思います。

小林：60年代は、高度経済成長期で希望の持った年代と言えるのではないのでしょうか？スウェーデンも毎年経済が成長するという前提の元に社会福祉政策を敷いていた。今そのひずみがきているんです。

大沢：しかし、楽観的な社会福祉政策への資本投資と今批判するのは簡単だけれど、ヨーロッパの国に先駆けて、それをした、というのは大いに評価すべきだと思います。少し急ぎ過ぎた、とも思われるんですね。

K・寿美子：戦争がなかった事で、スウェーデン人は大変ナイブになったきらいがあると思う。疑う事を知らなかったから、ここまで突進したのではないかしら。

大沢：60年代のアーティストは本当のクリエイターだったんだ。だから今でも随分活躍している。

和田：我々は、青春の真っ只中に、60年代のヨーロッパの中でも、1番輝いていたスウェーデンに来られた事は幸せであった。そして、それ以降も好きな事をさせてくれている国に感謝している、ということではないでしょうか。(編集構成 和田)

#### ◆「ストックホルム日本人会」

日本人会の前身は、1966年から名称を変えつつ複数存在したが、正式に協会 (Ideal Förening) として市及び県から認可されたのは1981年である。現在会員数1200名、事務所はストックホルム市におき、会図書館には、7000冊の日本語書籍を持つ。季刊誌「ストックホルム」は、会のイベント情報や、内外の評論家などのエッセイを、両国語で掲載。年間4冊発行、200Kr (3000円・郵送料込)

#### ◆ 連絡先

Japanska Föreningen i Stockholm (Toshiyuki Wada)・  
Vegag.3 111 29 Stockholm, Sweden  
E-mail: wada@swipnet.se



## 平成12年度臨時総会から

9月28日、霞ヶ関ビル33階東海大学校友会館で、臨時総会が開催されました。審議内容は次の通りです。

### <定款の改正について>

旧定款では不都合が生じるため、外務省からの定款雛型に従って大幅改定をしました。外務省へ定款変更許可申請をします。

### <役員を選任について>

新任理事 川崎一彦氏

1976年、日本貿易振興会ストックホルム事務所勤務を経て、現在、北海道東海大学教授、ストックホルム大学環太平洋アジア研究所研究員併任。

新評議員 池上佳助氏

1991、外務省欧亜局西欧第二課勤務、1994年、在ノルウェー日本大使館勤務を経て、現在、東海大学北欧文学科講師。

新事務局長 池田富士太氏

(株)科学新聞社代表取締役社長

\* (株)科学新聞社は、昭和21年通信院(現郵政省・NTT-KDD)総裁・松前重義(東海大学前総長)により創刊、菅礼之助氏(元東京電力会長)、茅誠司氏(元文部省科学教育局長・東大総長)、土光敏夫氏(元経団連会長)等のご後援を得て今日に至ります。

最近では、創業者松前重義氏が衆議院議員時代に提唱した科学技術基本法を数年前制定に漕ぎつけるなど、創刊以来50有余年、日本唯一の科学と技術の新聞として日本の科学技術の振興普及に貢献しています。

社長の池田富士太氏は、文部省、科学技術庁の公益法人にも関係し、日本の学術・科学技術振興に尽力しています。

### <会員について>

#### ◆平成12年度新規会員(H12.1~9月)

法人会員:(株)望星薬局、北海道電力(株)、東海大学平和戦略国際研究所、東海大学北欧研究会、ノキア・ジャパン(株)、山王総合設備(株)(6社)

個人会員:池上佳助、小野寺駿一、太田美幸、石垣雅弘、大関朗、浦智美、梶原茂喜、上村典子、佐藤俊憲、佐久間未澄希、トシコ・テル、田熊偉良、田付明、西下彰俊、難波克彰、西健太郎、藤咲裕美、難波真吾、牧野松代、山本勝、山口真人(21名)

学生会員:大城愛子、佐々木郷子、小針健太郎、鳥居恵美、戸嶋愛、長野智樹、福地潮人、吉岡拓如(8名)

#### ◆平成12年度退会会員(H12.1~9月) 名称省略

法人会員(1社)、個人会員(52名)、学生会員(2名)

#### <講演会・研究会について>H12.1~9月の実績

・2月25日(金)「スウェーデン北部暮らし」中島優氏 事務局イベントルーム(会報No.314)

・6月6日(金)「ハビリテーリングの先駆者たちから学ぶスウェーデン医

療チームの現場から」マルガレータ・ニルソン氏、河本佳子氏 スウェーデン大使館オーデトリウム(会報No.316)

・7月5日(水)「スウェーデン社会研究所の今後の方針」松前紀男氏 東海大学湘南校舎

・9月5日(火)「ノキアを目指すモバイル情報社会」ヘイッキ・カスコ氏 東京FMホール(会報No.317) 東京FMスリーハンドレッドクラブ、(株)科学新聞社との共催

### <その他>

#### ◆スウェーデン語講習会

100回目 H12.1月25日~7月1日(初級)

101回目 H12.4月1日~7月1日(初級)

102回目 H12.10月5日~H13.2月3日(初級B1, B2, 上級)

#### ◆新規事業

日本スウェーデンサイエンスクラブは、1993年4月、スウェーデンと日本の科学技術及び産業振興に寄与する為に、相互理解を深め、知識、情報の交流を行なう事を目的として設立されましたが、近年、主だった活動がありませんでした。しかし、「日本スウェーデンサイエンティストクラブ」と名称を改め、当事務局内において、活動を再始動する予定です。

#### ◆その他

11月11日、北海道東海大学の学生団体、北海道スウェーデン協会と協力し、「若者の結婚観」と題したシンポジウムを、当研究所が後援する事になりました。

## 平成12年度評議員会より

11月21日、霞ヶ関ビル33階東海大学校友会館で、評議員会が開催されました。審議内容は次の通りです。

◆JISS編「北欧ハンドブック(仮)」製作予定。常任理事の川崎、評議員の永山、池上の三氏がコアメンバーとなり、編集にあたります。

◆平成13年度の大使館でのレクチャーシリーズ第3,4弾の講師やテーマについて。北欧諸国から講師を招く、また、福祉問題に長年取り組んでおられる、評議員の菊池氏へ講師のご依頼やご協力をお願いしました。

### <会員について>

◆平成12年度新規法人会員(H12.9~11月):(株)霞ヶ関東海倶楽部、(有)湘南富士サービス、(株)ジェーシーシー、社団松和会、(有)静岡富士サービス、東海ウイング(株)、(有)東京富士センター

\*港北出版印刷(株)、山王総合設備(株)増額(9社)

# Books

## 「スウェーデンの分権社会」

伊藤和良著/264頁/  
2,400円(税別)

地方分権改革の第2ステージに向け、何をしなければならぬのか。自治体職員の日でレポートする、スウェーデン・ヨーテボリ市の現状。

\*ヨーテボリ市…スウェーデン西部に位置する人口45万人の都市であり、福祉や環境面での先駆施策を絶えず発信している都市である。国と地方政府との権限は明確に区別されており、福祉や文化、教育など市民生活に関わる全ての権限と財源は地方政府の手に委ねられている。



## JISS INFORMATION

講習会 スウェーデン語講座  
103回目開講!!!

2001年4月10日~  
7月21日(土)(全13回)

詳細は事務局までパンフレットをご請求下さい。郵便の場合は、必ず80円切手同封の上お願いいたします。(Fax、メール可)

### 事務局より

冬季休暇は、12月22日(金)~平成13年1月12日(金)とさせていただきます。

今年度も会員の皆様のご協力とご支援にお礼を申し上げますと共に、来年もスウェーデン社会研究所(JISS)をよろしくお願ひします。今世紀も残り僅かです。よいお年をお迎えください!

God Jul och Gott Nytt År !!!

## The Japan Institute of Scandinavian Studies

# JISS

(社)スウェーデン社会研究所 事務局(松元・Matsumoto)

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株)科学新聞社内5F

C/O Kagakushinbunsha, 1-8-1 Hamamatsucho, Minato-ku, Tokyo105-0013 Japan

TEL:03-5776-1835 FAX:03-5776-1836 E-mail:jiss99@tkg.att.ne.jp

URL <http://www.sci-news.co.jp/sweden/>

月曜日~土曜日(水、日、祭日休) 10:30~17:30 Mon to Sat (Wed, Sun, Holiday close)

スウェーデン社会研究所  
ホームページ

<http://www.sci-news.co.jp/sweden/>